交易問答　二下

国立国語研究所
128907
図書館

交易問答巻之下

加藤弘蔵著

才助　扨壱服やらかしませうか。是から又下手の長談義を始めませうが。そこで此の議論でハ。日本ハ日本國内の諸色で。十分ニ暮せる國でありますから。何も西洋人と交易をするニハ及ば

ないをさといひなさるけれど。失禮ながらそれが才一の人紀違といふものでござる。伊勢といふは先刻もお話申す通り。世が開始めて。だん／＼と賣買の道が開けし時分には。僅壹村壹人の内斗で賣買をしてありけれど。それからだん／＼と開けるに従ひ。拾里も二拾里も隔つし。國々に往

より来りして賣買とする様り
あり。それから又関東から上方の方
へ往よりは上方から関東へ来り採
して。賣買をする様になつてくるのでござ
るが。此様に往来して賣買とする様
になつきといふも。あながち其土地
土地で。物るすが不足ぶりならそうなる
なきといふのでハござらん。随分其

去地しく問よ合れだ。それでもも
まなひうハなけれども。そこが人間
といふ者ハ。畜獸杯と違て。知恵の有る
ま従て。お事なひしと十分よ全備
もる橋よ未さいといふ天性があつて。
又其未さいといふるが働次第で出来
る橋よ神様が生付て置て下されさ
うらの事でござる。そこでよく考く

見なさい。以前は公儀で。交易を盛に
しやうとなさつたのも。此度
天子様の交易を盛にあそばさうと
思召すのも。即此道理で。何も日本
國内の諸色で。ある物が足りないから
といふだけではない。足下のいひなさる
通。今迄交易をしないで済で来た日
本國の事だから。それでも済まない

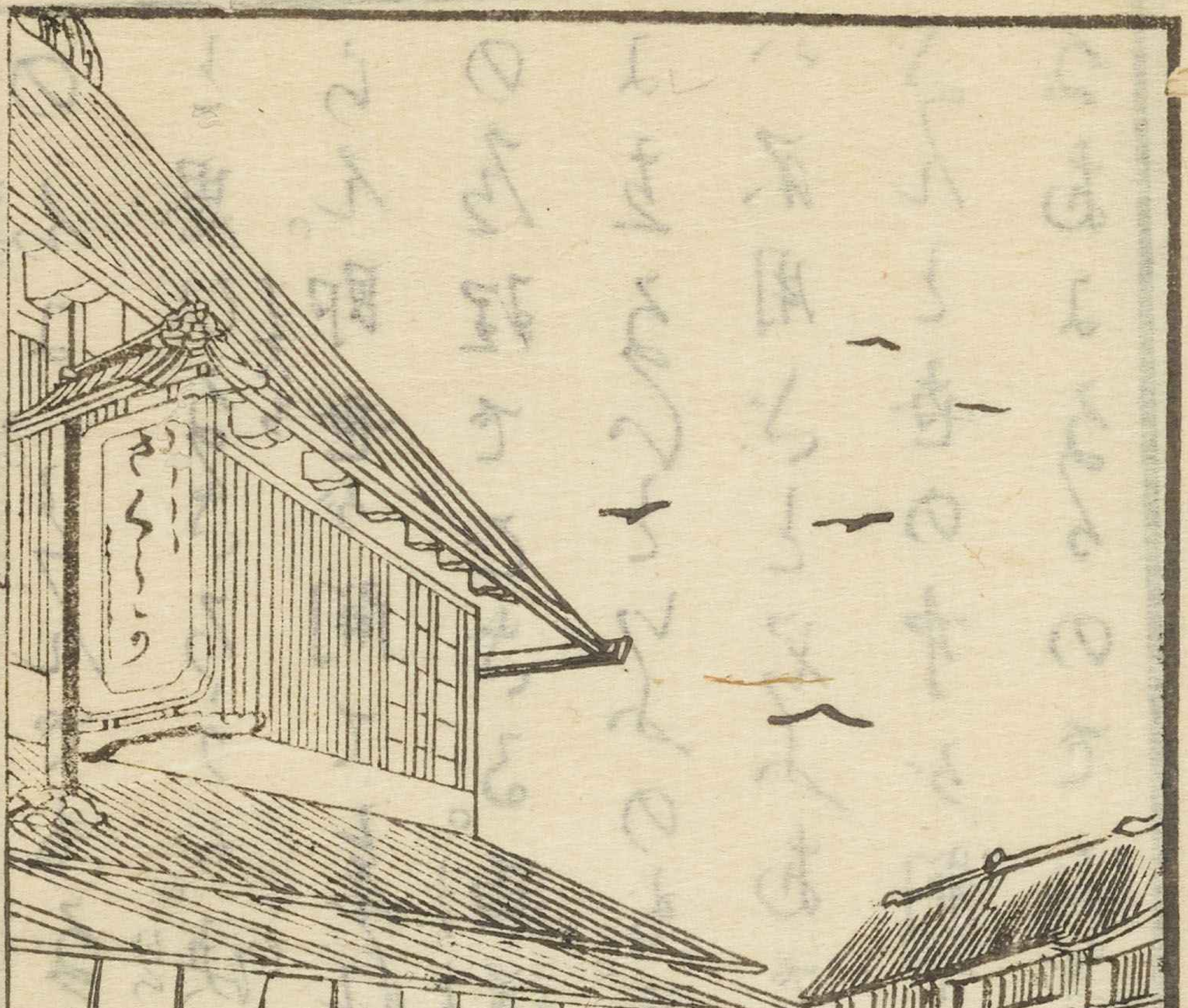
事ハなけれども。西洋國にも随分日本にない結構な品がいくらもあり。又日本にも西洋人の欲がる品がいくらもあるから。彼是交易すると双方のために結合がよくあるがおひく十分になつて。つまる所ハ双方の身上がよくなる相になるからの事でござる。併人によつてハ。西洋國から持て来る物ハ。

皆益にも立たない物ぞといふけれど。決してそうでハない。先ハ第一鉄砲ぞの。船艦ぞの或ハ時計ぞのを始め。中々日本でハ是迄思もつかなからふ。結構な品がいくらもあり。又品によりてハ随分玩具の様な物もあるけれど。そこがしらも此話しを通人間といふ者ハ。開て来るに従て。物事の全備する

のを好む天性があるものござる。すべ
てとかく入用な物が揃ふ上では。又玩具
も自然と入用な者になるのでござる。
唯壱通り入用な物斗ですむといふ
のは。誠に開けない國の事でござる。
譬ていはゞ。昔は髪を結ふにも油と
いふ者もなければ元結といふ者も
なかつた。唯藁か何かで結で居

た者が後世まで。油といふものができ。元結といふものができて。いまも立派に髪を結ふ様になつて。今でハ一日もなくてハならぬものなりました。昔しも理窟といつて見れバ。油がなくつても髪の結れぬ道理もなし。元結がなけれバ。矢張昔の様に藁か何かでもたくて束ても。済ない

道理ハなけれども。そこが即人間固有の天性で。あひくあるゆゑ全体まるのと好むものざうら。油といふあが入用なつて。それで鬢の潤澤の出る様な。いろ〳〵なと用ひて。ぶん〳〵巧者よなり。とでハやれ撥香ぶつの。松金香ぶれ。まぐつ〳〵のこうんぶのと。あひくよぜいふ〳〵なつて来さといふのハ。足下探



の心はいらんでもない奢侈の沙汰だと思ひなさろうが。決してそうでハござらん。即世が開て來れば。斯なるのハ自然の道理でござる。西洋國の物が皆精よきないといふのも。是と同じ事で。とハ不用だと思ふまでもこれらだんだんと世の中が開るに従て皆入用になるのでござる。それだうろあ

の入用不用といふハ大抵ハ世の開け次第の事で。唯とる暮してさへすれバよいといふぞ。昔も今も食物ハ腹が満さへすれバよし。衣服ハ寒さへなけれバよし。住居ハ雨露さへ凌げバよいといふ程なりけり。何も遠方のあとを求るにも及ばぬ。それこそ其村々の内で。何も角も事が十分に足

るよ相違ハなけれども。人間といふ者ハ決してきりハならん者でござる。それだから西洋人との交易ハ無用なもので決してせずともよいといへバ。矢張日本國内同士の賣買も決してせずともよし。又日本國内同士の賣買がせなけれバならん事なり。矢張西洋人との交易もせなけれバならんでハござらん

が。それはまださきつ近頃交易のおこりけ
で。眼前世の中の大経綸がゝみするゝ
さうがあるでハござらんか。それハ何ぐさ
といふに例の外國来の一件でござる。若
日本に國米がたいらならふゆの
あら。それこそ天保七年の飢饉にも
まして。世の中の難儀といふものハ大
どんなであらふか。全く外國来

のまいろさみど。僕等の相なる者ども。此節までどうやらかうやら矢張三度の飯をたべて居られるのでござる。それどうか此後とも。日本はどんなに飢饉があらふとも。世界中悉く飢饉になるといふても先づはないものぢや。そんな時分には何変かうら来ると持てくるは相違ないから。どふし

ても天保七年の相なる經綸ハ万〻歳
あるまでハござらうイナ。シト頑ふいさん是
等ハ決して西洋人のおかげといふで
はないが。全く交易のおかげでハござら
ん。

頑六
滅相是非の道理解ハ滅法至極でご
ざる。實まいらぬさう道。日本國内同士

の賣買も。西洋人との賣買も。畢竟ハ同ド道理なる。世が開るに從てハ。交易も矢張なければならんに相違ござるまいし。又外國米の一件抔も實にいひなさる通。全く交易のおかげに相違ござらん。但或先生の話に凡そ世の中に。最も大切なるのハ百姓でござって。百姓といふ者ハ暑さ寒

さのいとひろく年百年中泥まみれになつて農業に骨を折り。稲麦栽もどめ。すべて諸色を作り出してくれるものどもなれば世中天子様を始まいらして。僕華の枯る賤い者に至る迄身分相応にしるを安楽に暮して居られる。それぞれ本に愉ていつて見れバ。百姓ハ根ぐ。武家方

ともじめ職人や商人ハ枝葉の根な
者ござそうでござる。譬ハ松や杉を植る
まも。先ツ第一ハ根の枯れない根ハ。始
随ニ氣を附て根ゟ水を吸ふ根まもる
が。第一肝心なる事で。根さへ枯なければ。枝
葉ハ別ニ手を附ずとも。自然と生立
ものでござる。仮令いくら心を用て枝
葉を世話しられバとて。根を打棄て置

き日にハ。枝葉ハ自然と枯(かれ)るにきまる
ものでござる。人間は上も其通で。
は上で第一根(ね)の百姓を大切にて。農業
の盛なる根にさへなれバ。枝葉乃
は武家方や町人にハ別に世話がなく
とも。自然と其家業が安楽(あんらく)に出来る
ものぢやそうでござる。それゆゑ聖人(せいじん)
と申の徳(とく)にハ。百姓を第一に大切にし

て世話をしてやり。又商人杯といふ者ハ慾心の深い者で。濡手で粟を摑む様な儲をして。ぜいたくにおごりのふる商人が澤山にあつて。商賣の道が盛りなると。甚麼世の中の風俗がわるくなり。其上に大切な百姓が自然と氣が變つて。おひ／＼と田舍を逃出て商人になる様な事になつて。おのづと田地が荒る

損する事が出来るゆへ。何でも商人も
成丈取押て盛になるやうに損になるをさける
のが。府上の政道の事ハ一ざいといふもので
ござる。日本國内の事でさへ商人の盛
になるのハ。商賣によるものでござる。ましてや
けふ西洋人との交易までも盛
になつてくるならバ。此上世の中の風俗
がどんな事になるものでござらう。誠にけん

のんな話ではござらんぞ。

才助

頑六君失禮ながら足下の理窟ハ一向こゝろえらん。尤も偏屈な先生ハ、よくそんな事をいふものぢやがそれハその先生が漢土の大昔の事ハ何でも角でもよいやうに思ふて後世の事ハ悪でもよいやうハないと思込で居るものぢやからそんなみやうくさい事をいふのぢや

そんな説ハ今し世の開けない時分で
なければ。通らない事でそうでござる。
なる姓といふ者ハ。農業をするものぢ
ら。國の根の様な者で貴い者にハ相違
ないが。されバとて唯百姓斗あつて世の
中の治るものでもござるまい。職人や商
人といふ者があつて百姓の作り出しさ
おうらいろくの品を製へり。又甚お

と賣さばいたりするから。畢竟百姓の農業も益にたつ道理でござる。されどからすべて農工商といふ者は三鼎の柱なるもので。相互に助け合てこそある者で是ッでもなくつてもすむといふ者はござらん。併商人といふ者は。慾心の深い者で。濡手で粟を掴む様な儲として。ぜいたくに暮すものであるから。商人が多く

なつて。商賣の道が盛になると。世の中の風俗がこまくなるといひなさるけれど。それハとんでもないま違つた理窟でござる尤商人といふ者ハ。百姓に比て見れば。暑さ寒さの凌もすくなく。随分人のこまい者で。利を儲る事も大きいけれど何も丸で濡手で粟を掴む拾る儲手出来る者でもない。又人の

こゝろといふのハ。商人ハ百姓とハ遠く。市中に住て身体ハ楽ぢやが。んで骨を折らなけれバならぬ家業ぢやから。自然と知恵が開るもので。それ故どふも徳實な風が薄くなるものでござる。從是ハ人々神様から戴いた固有の知恵を磨き出すので。自然とさうなるのぢや。あながちこゝろいるゝと

ハいりません。是とこういといへバ人々ハ成丈
る鹿よ育て。固有の知恵を出させる
いたしまするがよいといふよみなるか。従へれ
でハ神様の御趣意よ背くでござらぬ。又
ござら人々の知恵が開て来れバ自然
と徳實なる風の薄くなるのハ仕方が
ないが。されども商賣さへ盛よなれ
バ人がこうくなつて。世の中の風俗が

乱れてもよいといふ道理ハ決してない。第一風俗ハ正くなけれバならんまでござるから。そこで　街上で成丈学問の開る様に世話があつて。假令は活計に追れて学問をする事が出来ない者でも。自然と学問をする者を真似るやうに世話をなさるのでござる。尤も學問を志されぬとて悪人がないと

いふ譯ではなけれども。惣体学問と
いふものは。人の風俗をよくするのよ。
第一肝心な事より遠ござらん。さう
いふなれげござら。是佞ハ商人と冠儺の根
ないひなさるけれど。それハ決してさう
いふ者ではござらん。又商人が益よりすれ
ば。大切な百姓が自然と氣が變つ
て。おひ／＼と田舎を逃出して。商人や

職人抔よりなるから。田地がおひくと荒(あれ)るといひなさるけれど。是も甚だ差さ理窟(りくつ)でござる。尤もいひなさる通。百姓といふ者ハ。壱生骨(ほね)の折(をれ)る者よ相違ないから。随分(ずいぶん)田舎と極て。商人や職人よりなる者がないでもないが。併それ斗でハ田地のあれる様迄よりなる者でハござらん。尤西洋國(とうどんのくに)でハ古昔(むかし)

百姓の年貢が重すぎて。田地持が。自分の作つくる稲麦の半分余も年貢に取れ。其上に何ぞの角ぞのと名を付て。金を取れたり。人纔につくられたりするものながら。何分にも百姓でハ活計が立ぬ故。據なくと田舎を逃出て。商人になる者もあれバ。小職人になる者もあり。中でも

極貧乏な奴ばらの。懶惰者がのハ。乞
食よまでなる者があつさそう
でござる。あしそういふ訳でおひ／＼と。
百姓が減て田地が荒てくるものざ
から家業ハ自然と衰て。元の仕出
がおひ／＼と乏くなつて来て。矢張高
貢も盛なるどころの話でハなく。
なつてずん／＼さびれてきさな。職人

や商人が多くあつまるとて。何の詮もなく。まの甚しく其國が衰微しゆく出ゆまつるそうりゞが。是ハ全く百姓の年貢が重すぎて。どふしても百姓をして居てハ。活計がつきにくいからの事で。何も唯百姓の家業が職人や商人から見ると余程骨がおれるからきたりあつまるといふわけでハ

ござらぬ。それゆゑ年貢や
運上の平均がよく保りて百姓の手
貢身が重をござるといふ始まさへなけ
れバ百姓が減て田地が荒るとい
ふ事もなく始終農工商が三ツ共都合
よく参るものぞそれでござる何故
といふは譬へバ百姓計が多くて職人
や商人がすくなけれバ百姓のあり

かるぶんくと職人や商人よまつて。金と儲る工夫とする奴が出来て。丈りらおひくと農工商の三つが割合よくなり。又職人や商人が多くて。百姓がすくなけれバ。又職人や商人の中からも百姓よなつて金儲とあやりといふ者がいくらも出来るから。別段彼是と村上でも骨折

がなくとも。自然と釣合よく參る
に相違ござらん。それだから曲尺工
商といふ者ハ三器で。三ツ共用ひ格に
世話をしてさへあれバ。三ツが三ツ共
おもしと益になつて。そこで其の
身上がぶんくよくなるものござらう
でござらう。それだのに偏屈な先生と
いふ者ハ。此格な道理を知らないで。

百姓身を大切にして。農業の盛なり
なつる根ハ骨折り。職人や商人ハなかり
もけ取(とり)なさへて。商賣の衰(おとろ)る根ハ志
せつ探といふけれど。それハおゝまり
まりらるいといふもので。職人や商人
の仕事が衰れバ。自然とおのづけ
りしるがつらるしなるから。畢(ひつ)竟(きやう)ハ矢張
農業もおとろへて。百姓がしんく

貧乏なるのハ眼に見へぬ道理で。
決て六ヶ敷理窟でも何でもござらん。
尤　御上で刑罰に彼是と御世話を
なさらばとも。よいとハいふりのくふん
ぶんと國の身上のよくなる始に其道
をつけやうと思召ば此時節ハ第一
商賣の方に此世話があつて。諸色
のねけうさの廣くなる始になさる

のが。肝心な事ぢやさうでござる。諸色のはけりこさへよくなれば。元の仕出がずん〱と多くなる道理ぢやら。そこで百姓や職人の仕事が。自然と多くなるは言迄ござらん。此度東京や大坂は。交易場をお開きになつて。ます〱交易の盛になる様になさるといふも。即商賈の方にお世話をなさ

つて日本國中の諸色のちけうくさをよ
くみさるつといふ。ありがたい思ひでご
ざる。從御上の御世話といふのも。唯商
人に其道を任して御やりなさるだけり
で。別にあれもこれもといふ談(だんど)するに御世話
をなさるのではござらん。西洋國(せいやうのくに)では。
昔王様(むかしわうさま)がいろいろと瑣細(さいさい)なる事までく
世話をやいさりのざそうざが。それは

りへつてよろしい事で。誠に商賣の
害にならぬ事でござるそうじやといふ
ことばかりじや。當時(とうじ)では先ツ第一に諸色
のねだんがよくなる相場さへ世話
があれば。自然と百姓や職人の仕出
す諸色が多くなつて。畢竟ハ日本
國の身上が。おひしよくなることで。
決して偏屈(へんくつ)な先生のいふやうなぞ

屁の理窟ハ取るに足らぬものでござる。

頭六

足下の御論ハ実に御尤至極。然呑込ませぬ。僕もとふ云ハそれゆゑ道理ハ合らぬ。唯偏屈な先生のいふことをまことと斗思て居らず。今の御理解で始て蒙がひらけました。併まだ晴ぬどふも僕

の胸にをちない事がござる。其通り
の理窟でいへバ。足下の御理解の通り。
交易といふものハ決してならぬものでハ
ない。實ハなくてならぬものハおほくハ
ござらんが。併先刻も御話しゝ通。元來
英吉利だの。仏蘭西だのといふ醜夷
が。日本へ來る目的といふ者ハ。先交易
を聞てぶん〱と日本へ入込。次第により

人と親しくなりて。日本人を欺して
なびくと帰服させ。おみづと日本の諸
色を買はしてずん〳〵弱らせ。遂に八
日本の國迄も彼奴等があまねり
といふ。恐しい目論見があるといふ事
と。先生がくはしく話なさるが。これハ
どふでござらふ。若醜夷が本道ならそん
な太い目論見で来るのならば。仮令

交易がいくら結構な事かもしれぬ。そのかはりに後々日本國にも。彼奴等があまされる様な事でハ。誠に飴に包んだ毒を喰ふ様なものでハござらぬか。ナント才助さん足下の御論ハどうでござる。

才助 足下の御話も一應ハ御尤でござる。往昔

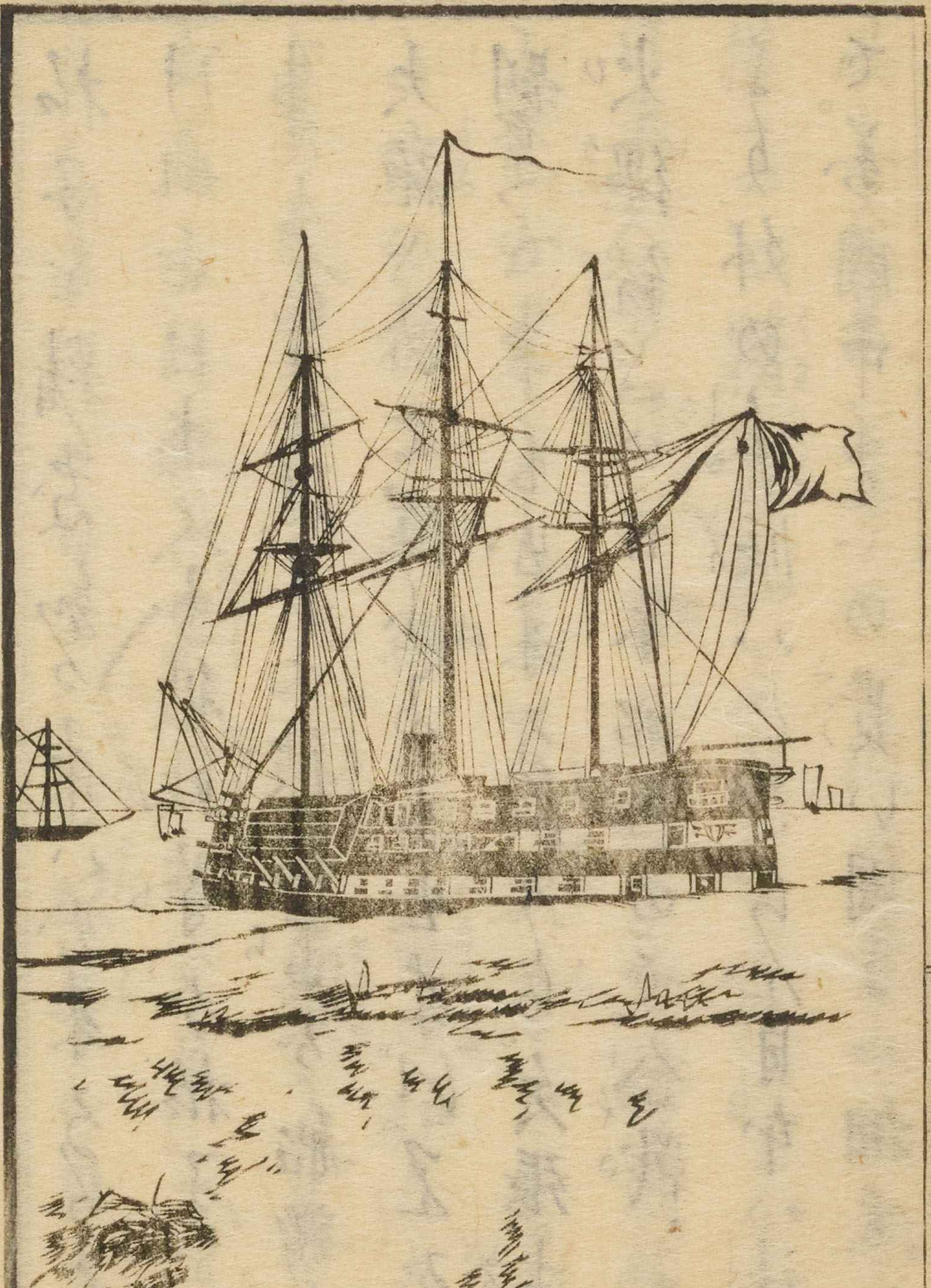
太閤様時代は未さ西洋人ハ元来日本を奪ひとらふといふ目論見があつく未さはお盡ござらんが。此節世の中がおひ〳〵と開けて。唯何の道理もなく。人の國をとらふといふ事ハできない世の中で。仮令壱ヶ國や弐ヶ國ハ。そんなことがあつても。其外の国〳〵で承知いたすものでハござらん。しかしそうハいふものゝ。人間

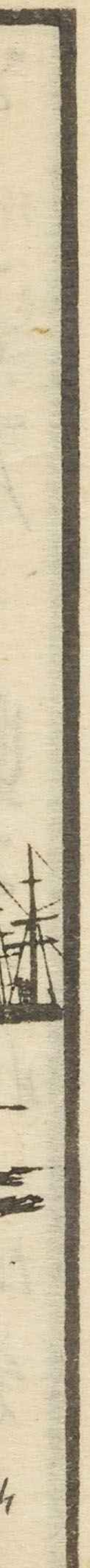
といふ者ハ。何時まで立ても怨仇の絶る
ものでハござらんから。その西洋人にも
そんな目論見が決してないともいえ
れバ。まづ支那などでハいろいろの手遣
から合戦の起つたこともあれバ随分
とすべきによつてハどんな間違から。何時
何時合戦を始まいものでもないから。
先西洋人にハ十分太い目論見がある。

者と思て居るけれバならんでござる。併僕等の考でハ仮令西洋人はどんな目論見があらふとも。矢張此方でハ怖ず臆せず。交易をするのが上分別でござる。何故といふに。西洋人は實は日本をとらふといふ念があれバ。仮令交易をお断りなさろとて。それでハ念がらせるものでもござるまい。

其上交易とすれバ彼奴等も日本の
様子と精義知るぶらふけれど。まづ
日本人も彼奴等が様子を精義知る
るも出来るし。まづ彼奴等が考出し
さ城の様な船艦ぞの雷の様な大砲
ぞのも買取るし。見習て製る事も
出来るけれど。発自初交易を断
りなさうさりまハ。彼奴等も日本の

様子を精しく知る事ハ出来なからふ
けれど。日本人も彼奴等(きやつら)が様子を知る
事も出来ず。其上彼奴等(きやつら)が船艦ぞの
大砲ぞのを買ふ事も出来ず。それで
製る事も出来ないから。矢張古い
火縄銃(ひなハづ)ぞの日本船ぞので。合戦(いくさ)をする
より外の手段(しゆだん)ハござらん。日本ハ神國(しんこく)
で。萬國中第一の貴(とうと)い國にハ相違ない





海岸に大砲を備る図

が。迚も火縄銃や日本船で。今時の合戦が出来るものではござらん。それとても神國の名まで汚を招る事が。出来ないとハいへません。そういふわけだろう。西洋人はそんな太い目論見がある ならバ。日本でハ猶怖に膽を西洋人は負るない氣になつてどんどん交易をしてぶんぶん盛になれば。此方から

もち出掛て交易をするといふ相にさく
まされバ。假令西洋人などが目論見
があつても却て神国の威勢にをそ
れて。遂にハ其目論見も挫てしまい。
畢竟ハ交易の道が開けさ丈日本の国を
徳にするでござろう。すべてこういふ
道理があるのざうら。先年亜米利
加の来さ時分に。大公儀で甚に交

易を御許容になり。獨又ら度
天子様の御政治になつても。ますます多く
交易の盛になるゆへに。東京をはじめ
大坂や兵庫にも。交易場を御開き
になつて。おひく日本國の身上がよ
くなる様に。厚い御世話のあるのハ。
實にありがたい御政道でハござらん
か。ナント頑六さん。足下の御論ハ如何ぐ

おいでる御明論(ごめいろん)があれば伺ひませう。

頑六　だん／＼の御理解識(ごりかいしき)に感心(かんしん)いたしました。実に足下(おまへ)の御話の通り。仮令西洋人(とうじん)にどんな理論(りろん)があるにもせよ。矢張怖(きゃ)に聴(き)せば交易(かうえき)とするのが上分別ばお遠ござらん。しかし此根(こん)本道理のある事とはしらば。御上の御政道(ごせいどう)

と彼是とやかく申上るのハ。誠に恐れいつた事でござる。

才助 僕の愚論が大旨は解ましたらう。それでこそ僕も大話申さ甲斐があつて。よろこばしうござる。此の世の中の風俗といふものハ。維新の際ものこらず。漫に西洋人と褒る人様が多

いのは。足下ハ心底西洋人といふ者ハ太い奴で交易ハこわい者と思て居るやうさうなが。と云ハ僕のいふことを知らなさらんだが。だん/\と僕の話がお胸に落さりのだうち。サラりと以前の御論を棄ておまいなさつた所が実ハ貴いはんで感心いたしました。そこでだん/\ハ話すさ相成ることげござりやうち。交

易(えき)ほど結構(けつこう)なものハなし。交易さへ
あれバ國の身上ハおのづとよくなつて
諸色(しよしき)の高いのも苦(く)にならバ反(かへつ)て
昔の物のやすかつた時分よりハ楽(らく)
よくなるけれどそこでござる。是から
ずんずん交易が盛(さかん)になつたらバ。それ
こそ昔(むかし)土(つち)を升(しやう)に金を升といふ
さ東、京が。是(これ)からハ土を升に金

二件にも三件にもなるでござらう。ナント頑六さんおもしろい世の中になつて来たでハござらんか

杞憂堂先生側より

オツト手助大人俟かねまして。僕をまだ感服いたさん。貴様ハ例の耶蘇教の事を何と思ふや。是から交際が盛になるに就ても。此耶蘇教の一件が僕ハ實

に心はかゝるが。貴様ハ此邪教をよいものと思ふや

才助

是も實に御尤至極でござります。實に耶蘇教と申者を可悪ものて。大に我皇國に害のあると申ますハ。毎度諸先生方も承つて居ります。乍去其れハ御條約面にても。洋人が

決て日本の人は勸込ることはならぬと中には直取極ざそうでございますから。万々一彼奴等が存知を以て勸込破ることをいたしますれば。それこそ彼奴等より。信義を破さ己けで神様へ對して此上の大罪をございません。その時にはいなまば。それこそ日本國中の人が。貴賤上下となく。

身命を抛て。彼奴等を鏖して。我神威を輝さねばならぬことでございませふ。其の時に僕の栢るものでそ。神様の御庇をうけて。神法の民と生れよ御恩報まれ其れこそ彼奴等が喉笛に喰付ても。五人や十人の醜夷は喰殺す積りでございます。併此頃も皇學とか申て神代

の篤い道が。追〻御盛になるそうでございますから。仮令彼奴等が如何様に骨を折て。耶蘇教を擴めやうといたしたとて迚も及ぶまでもございますまい。誠に難有事でございます

把憂堂先生
出来たり〳〵。貴様も　神國の民だけあつて。両様は大和魂を備へて居

るとハ感心じや　神国の民を。實よ
斯こそあらまほしものじや

頭六

妙てく〳〵。万一彼奴等が。そんな不届手
万な事を仕出かしあらば。頭六と
いふ老耄爺でも。才助殿まを决して
負ぬ積でおざる。此爺歳も七拾三ざ
がまじ蟲を大丈夫ざ。拾人や二十人

の醜夷と叱叟ま人でも喰殺てやる
でござろうアハヽヽヽヽ

交易問答巻之下 大尾

交易問答跋

昔釈迦如来霊鷲山に法座を
設け大乗の教を説んとせられしに。
一座の大衆の疑惑おほくて。
若信まゐるそのなりんこもを患ひ。

先試に小乗の説法あまたゝびに摂
聞縁覚を初として。異口同音に讃
歎し。随喜浅からざりしかば。それより
漸く中乗に移る。末後にいたりて
佛法の極意大乗の真面目を

説法あましとくのやうの座を観て法を説くといふ謀は此時より始めなるべし。嗚呼才助は才よく頑翁頑六は情を穿ち。一言に下肺肝を曝し。終にこれを心服せし

むる。実相を観て法を説けれ
巨擘といふべし。

梅園仙史書

東京府第一大區小四區 [illegible]土代町四丁目五番地
佐原純一

明治二年己巳四月

官許

加藤氏藏板

3500
128907
W373
Ka86
2
100 1795879